

事例

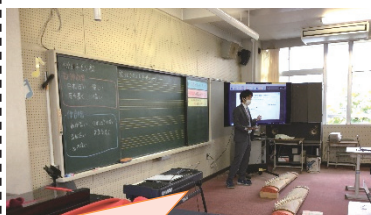
5 学年 「日本の音楽に親しもう」

本時のねらい：二つの音階の感じの違いを味わい、どのように歌うのかについて思いや意図をもち、歌唱表現の工夫を考える。

一斉学習と個別学習をバランスよく取り入れ、考えを深める

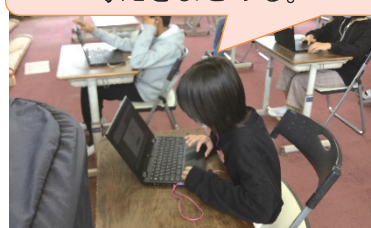
○本実践で見られた自ら学びを調整しようとする姿

- ・二つの音階を聴き比べ、既習の知識を生かして違いを自分なりの言葉で表現しようとする姿
- ・個人での活動後に、仲間の考えを全体で共有することで様々な考えに触れ、1人1台端末で何度も音源を確認しながら、より考えを深めようとする姿



教材・教具の配置を工夫。

1人1台端末で音源を聴き、考えをまとめる。



考えた工夫を歌って試す。



個人活動中は個別に支援。



箏の演奏を聴いて、音階の違いについて実感を持った理解につなげる。

こんな姿を引き出すために・・・

学習過程の工夫

本実践では、鑑賞活動で日本の音楽に触れ、箏の演奏体験を通して音色や音階の特徴を感じ取り、「子もり歌」の歌唱へとつなげていくように授業を構成した。

前時までの活動では都節音階の「子もり歌」のみを歌唱し、本時で律音階の「子もり歌」を聴取させ、二つの音階について学ぶ。

○児童は、1人1台端末でそれぞれの「子もり歌」を何度も聴きながら、それぞれの音階が生み出す雰囲気の違いを感じ取って、自分の言葉で表していく。その後、全体で考えを共有し、それを基にさらに自分の考えを深めていった。

○音階の生み出す雰囲気の違いを感じ取ったところで、どのように歌うのかについて個々で考えを深める時間をとる。ここで考えるパターンを「①都節音階の表現の工夫」「②律音階の表現の工夫」「③両方を比較した表現の工夫」の3つから児童が各自で選択して歌唱表現を工夫することができるようにした。

○児童が考えた歌唱表現の工夫は、実際に歌って試し、全体で意見や感想を共有することで、「よりよい表現の工夫をしたい」という意欲をもつことができた。

このように、教師が個人での活動と全体での考えの共有を適切に学習過程に位置付けることで、児童が自分の考えを深めながら学習を進めることにつながった。また、個人での活動の時間には、教師が個別に支援を行うことで、苦手意識をもつ児童も自分の考えをまとめたり、表現の工夫を考えたりすることができた。

中学校 音楽

事例 1

1 学年 「和音の構成音をもとに、音のつながり方を工夫して旋律をつくろう」

本時のねらい：音のつながり方を工夫して、つくった旋律をよりよいものにする。

創作活動で活用するアプリを生徒が自分で選択する

○本実践で見られた自ら学びを調整しようとする姿

- ・自分自身のスキルに合わせて選択したアプリを活用し、試行錯誤しながらよりよい旋律をつくろうとする姿



紙のワークシートも用意し、自由に活用できるよう工夫。



こんな姿を引き出すために…

ICTの活用

本実践では、「Song Maker」「バーチャルピアノ」「Flat」の3つのアプリを用意し、生徒が自分のスキルに合わせて活用するアプリを選択できるようにした。個人学習だけでなく、仲間とアドバイスし合う協働的な学習や全体での共有も1人1台端末を用いて簡単に行うことができるため、創作を苦手とする生徒も含め、全員が作品を完成させることができた。

1人1台端末を活用して仲間とアドバイスし合う。



事例 2

2 学年 「歌舞伎の音楽の特徴と人々にとっての意味や役割を理解し、魅力を味わって聴こう」

本時のねらい：音楽の特徴を聴き取り、人々に長く親しまれているのはなぜか考える。

知識を得たり生かしたりしながら、生徒の関心を高める課題設定

○本実践で見られた自ら学びを調整しようとする姿

- ・これまでの学習で得た知識と新たに得た知識を生かし、江戸時代と現代における歌舞伎の音楽の意味や役割を考えながら音楽を味わって鑑賞し、自分の言葉で表現しようとする姿



音楽の意味や役割について、グループで考えを深める。



こんな姿を引き出すために…

学習課題の工夫

「どうして歌舞伎は人々に長く親しまれているのか」を考えて鑑賞するという課題に迫るために、要素を焦点化し、雅楽と比較鑑賞したり、場面ごとの特徴を聴き取ったりする活動を設定した。

1 学年での学習で得た知識を生かしながら新たな課題に向き合うことができ、生徒が関心をもって学習に取り組むことができた。



生徒に学習内容が伝わりやすいよう、モニターと黒板を併用。